

昔、針金や釘などを量り売りする際、重さを量るのに使った竿量り。店の奥で埃を被っていた。

金物を商う

吉田カナモノ

吉田カナモノは言問通りと不忍通りがぶつかった角地にある。昔は間口三間半の広い店構えで、敷地内にお稲荷さんや井戸もあったが、昭和45年ごろ、地下鉄千代田線の根津駅ができて、通路建設に店舗の半分を手放した。

現在の店主の吉田祺一郎さんは三代目。店はお祖父さんにあたる斧次郎さんが明治34年に創業した。鋼材屋の親方に一年間、礼奉公に行き、暖簾を分けてもらったのが始まりという。

「親方の商売に差し障るので、祖父は鋼材ではなく一般金物を商い始めたようです」と祺一郎さんは説明する。「このあたりは金物を使う職方が多いから食っていったんですね。根津神社を建てるので、徳川時代に各地から連れて来られたんでしょう。大工さん、経師屋さん、左官屋さん、小舞屋さん、腕のいい職方がたくさんいました」。経師屋は襖や壁貼り、小舞屋は土壁の下塗りなどを専門とする職人だ。



有限会社植田屋 吉田カナモノの三代目ご主人 吉田祺一郎氏。



言問通りと不忍通りの角にある吉田カナモノ。かつては地下鉄通路のところまで店があった。左は奥様、右はお嬢さん。

その後、父親の孝一郎さんが商売を継ぎ、やがて祺一郎さんが切り盛りするようになった。「金物屋の商売は問屋やメーカーに通って、肌で覚えていかないといけません」と祺一郎さんは言う。「たとえば建築材料にしても時代によらずいぶん変わります。昔は家を建てるのに鋸と羽子板、短冊などいくつかの道具しか使わなかった。腕がいいから鑿で彫って組み立てていく。お城でも五重塔でも釘一本使わないで立派なものができる。いまはそんなことはできないから、技術の足りないところを金物で補うわけです。建築用の金物は、何百種類もあるんですよ」

農学部もずいぶんとお世話になってきたようだ。演習林や植物園で使う鋸、金槌、脚立、さらには実験に使う金物など、いろいろな道具をこの店から調達してきた。

「親父が元気だったころ、わたしも農学部の事務局の方に可愛がってもらいました」と祺一郎さんは振り返る。「いっしょに車に乗って植物園に品物を運んだり、演習林で作る炭を分けてもらったり。当時は今よりもっと寒かったから、ありがたかったですね」

いつかこの店の経営を娘さんに手渡す日がくるのだろうか。「今後のことはわかりません。成行きに任せるしかありませんよ」と祺一郎さんは洪い顔で微笑んだ。「古くていいのは、お酒と……うちの女房くらいですかね」